陶磁器をみる様々な視点

文学部教授 髙島 裕之

たかしま ひろゆき
専修大学文学研究科歴史学専攻博士後期課程修了。駒澤大学禅文化歴史博物館開設準備室、駒澤大学禅文化歴史博物館を経て2010年より専修大学文学部勤務。

↑生田９号館屋上にて

陶磁器の考古学

私は文学部に所属し、ジャーナリズム学科で情報文化アーカイブ科目の「記録・史資料調査法」、「文化情報資源論（博物館）」、そして「「交易の文化・文化の交易」論」、資格課程の学芸員課程で「博物館実習」、「博物館展示論」を担当している。博物館に関する科目が主であるが、私自身は様々な視点から実物資料をみることを学んでいる。

研究テーマの1つが「陶磁器の考古学」である。一概に「陶磁器」というが、実は日本では「陶器」と「磁器」は原料や焼成温度などが異なる、別の種類のやきものである。ちなみに磁器は鉄分をほとんど含まない白い「陶石」から作られ、やきものの中でも最も高い温度で焼かれる種類である。17世紀の初めに日本で初めての磁器生産が有田で始まり、1650年代には世界に流通する商品、「貿易陶磁器」となった。有田磁器は各地の受容にこたえ、様々な形とデザインを生み出した。

現在では陶磁器を器として使うことが、希薄になってきている。しかしコンビニエンスストアで弁当を買い、ペットボトルでお茶を飲む以前の生活では、人々の暮らしに陶磁器が寄り添っていたのである。陶磁器は「生産」され、「流通」し、「消費」される。段階を追っていくと、生産の遺跡には窯や工房、流通の遺跡には港、沈没船、消費の遺跡には、都市や村落などの例がある。生活に密着し、土の中でも腐らない陶磁器はあらゆる舞台で出土し、時代の物差しともなる資料である。

現在の伝統技術から過去をふりかえる

陶磁器の「生産」を考えるうえで、窯跡の出土資料の検討は欠かせない。しかし実際に製作過程の途中段階で廃棄された資料を観察しても、不明な点が多い。そこで窯元で伝統技術について実際に聞き取りを行ない、記録ができたらと考え、磁器の生産地である佐賀県の有田焼の窯元、長崎県の三川内（みかわち）焼の窯元、有田町、佐世保市の教育委員会に協力いただき、ゼミナールの学生と調査を進めた。

江戸時代と現在の技術では、直接繋がらない部分もある。しかし装飾の際の絵付け1つでも、どのような種類の絵具を使うか、筆などの道具へのこだわり、器によってどこから絵を描くのかなど、過去を探る様々な考察の視点を得ることができた。

ヨーロッパに運ばれた有田磁器

2016年に専修大学相馬学術奨励基金海外研究員として、オランダのアムステルダムを拠点に1年間学ぶ機会を得た。アムステルダムは、江戸時代には有

↑三川内焼の窯元（平戸松山窯）での聞き取り調査

↑オランダ・フローニンゲン博物館

↑復元されたイェーテボリ号（スウェーデン・イェーテボリ）

→イェーテボリ市街のガーデンではイェーテボリ号出土陶磁器の破片が装飾として使われている。

田磁器を運んだオランダ東インド会社の本社があった場所である。これを契機として2019年まで、ヨーロッパへ毎年定期的に資料調査に訪れた。

オランダ北部のフローニンゲン博物館は、19世紀末の開館以来、中国・日本を中心とした陶磁器の豊富なコレクションを充実させ続けている。コレクションには17世紀から18世紀にかけてオランダ東インド会社によって運ばれた有田磁器もあるが、19世紀末から現在まで収集されたアンティークが混在する。しかし収集された博物館資料から、過去の交易品の全容が把握できる。私は深い考察を行なうため、博物館のストレージに100回以上通い、有田磁器の基本情報を集め、状態を確認しながら実測図を作成した。1つ1つ寸法を把握し、細かい視点での観察を進め、成形方法、作り方についてみることで、日本の伝統の中にないヨーロッパの特殊な器形の注文に応えるための、多様な工夫を知ることができた。

一番目を引いたのは、成形するのにロクロを回すだけではなく、型や部品の接合を多用していることである。現在は、ドロドロの泥漿（でいしょう）を石膏型に流し込む鋳込み成形という方法で、あらゆる形に対応できる。しかし江戸時代の陶工は、自分たちの持っているその当時の製作技法を駆使して、目の前の注文に対応したのだった。「流通」、「消費」の舞台へ移動した資料から、生産者のメッセージを垣間見ることができた。

北欧の沈没船資料から

スウェーデンのイェーテボリ海洋博物館、市立博物館は、スウェーデン東インド会社の船、イェーテボリ号から出土したアジア産の陶磁器を所蔵している。イェーテボリはスウェーデン東インド会社の本拠地が置かれた場所で、イェーテボリ号は中国の広東まで航海し、1745年に帰航の途中、イェーテボリ沖で沈んだ沈没船である。交易品として運ばれた中国の景徳鎮製品を中心に、破片も含めて5tの陶磁器資料が確認されている。景徳鎮製品を包んだ漢字表記のある梱包材も出土していて、陶磁器の文様と一致する例も確認でき、「流通」の様相が明らかになった。

沈没船の出土陶磁器には交易品として運ばれた商品以外に、航海の中で船上の生活に使われ、「消費」された器がある。イェーテボリ号の出土陶磁器として1点だけ、有田磁器の皿があった。有田の皿を間近でみると内側全体に擦り傷がみられ、船内での使用品であることが解った。実際に資料を目のあたりにすることで、商品として積載されたのではなく、既に船上で「消費」されていたことをつきとめることができた。

今、実物資料をみるということ

このように博物館にも所蔵される陶磁器資料に真摯に向き合いながら、様々な思考を巡らす日々を送っている。いわゆるコロナ禍の時代、気軽に人に会うのも難しい中で、デジタル技術が発達し、バーチャルミュージアムなどが充実してきた。そして博物館に直接訪れる機会も、少なくなりつつある。しかし私自身は眼前の資料に関して、体になじませながら深い本質を追求する体験を忘れないでいること、そして今後もその経験を重ねていくことを大切にしたいと考えている。もちろん、その機会を作っていただいている様々な方々からの温かいご厚情を忘れずに。それが物事の本質をみる眼をみがく、唯一の方法であると思うのである。